北海道新聞　2006年（平成18年）5月31日（水曜日）

学んで治そう

小児鼠径ヘルニア　18歳ごろまでには手術を

Q　中三の息子の母。週末の夜、息子が「おなかの下が腫れて脱腸（鼠径ヘルニア）みたいだ」と訴えました。二日前に高いところから飛び降りたのが原因ではないか、と言います。翌日は休日なので様子を見ました。翌々日、息子は「戻して治った」と部活に出かけました。その後、何もなく普通に生活していますが、このままでよいのでしょうか。

〈回答〉
みやざき外科・ヘルニアクリニック（札幌市中央区）
宮崎　恭介さん

高い所から飛び降りて着地したときには、腹圧が急激に高くなります。もしも、下腹部に腹壁のすき間があると、こうしたときにおなかの臓器を包んでいる腹膜や腸が飛び出して、皮膚の下に腫れを自覚します。普段の生活では腸が飛び出すような腹圧の上昇はなく、腫れもありません。これが鼠径ヘルニアの典型的な症状です。脚の付け根の下腹部（鼠径部）が腫れて、大きくなると睾丸まで腫れます。

小児鼠径ヘルニアは、一般的に五歳ごろまでに両親が気づき、腹壁のすき間をふさぐ手術で完治させることが多いと思います。息子さんの場合は、もともと乳幼児期には気づかないような小さな鼠径ヘルニアがあり、最近になって部活動で腹圧が高くなるような運動が多くなったので、小さなすき間が徐々に大きくなり、鼠径部の腫れを自覚するようになったものと考えられます。

診断は、まっすぐ立ったとき（立位）、大きくなる鼠径部の腫れがあれば間違いなく鼠径ヘルニアです。また、腫れがなくても、腹壁のすき間から突出した腹膜同士が擦れ合うわずかな感触があり、外科医が注意深く触診すると診断できます。

治療は、手術以外にありません。具体的には、鼠径部の約二㌢の傷から腹壁のすき間を糸でしばってふさぐ、二十分程度の手術です。息子さんの場合は、今のところ小さな鼠径ヘルニアですから、緊急性はなく、すぐに手術をする必要はありません。しばらく経過を見ても問題ないと思います。

ただ、小児鼠径ヘルニアを放置したまま成人になると、腹壁のすき間が大きくなり、周囲の筋肉も弱くなります。この場合には、すき間を糸でしばるだけでは不十分で、特殊な網目（メッシュ）状のシートですき間をふさぐ別の方法になり、手術による体への負担もやや高くなります。ですから、少なくとも十八歳ごろまでには手術を受けた方がいいでしょう。現在、鼠径ヘルニアの手術は日帰り手術が一般的です。週末に手術を受けると、翌週から普段通りに登校することができます。